オルダス・ハックスレー
「クローム・イエロー」(翻訳①)

桑　原　加代子

第1章

今までこの鉄道に急行が走った事はなかった。汽車は全て――といってもほんの数本だが――各駅停車だった。デニスは駅の名前を暗記していた。ボール[1]、トリトン、スパビン、デラオー、ティンパニー行きの乗り換え駅ニップスウィッチ、ウエスト・ボールビ、そしてやっとキャムレット・オン・ザ・ウォーター。キャムレットで彼はいつも降りる。そこから汽車はどこにいくのか知らないが、ゆっくりとイングランドの緑あふれる中央に向かって進んで行く。

汽車は、今ウエスト・ボールビを発車した。やれやれ、次の駅だ。デニスは網棚から荷物を下ろし、座席の前の角にきちんと積み上げた。無駄な事だ。しかし何かせずにはいられない。積み終わると座席に深々と坐り込み、目を閉じた。とても暑かった。

ああ、この旅行！彼の人生から2時間きっちり切り取られた。2時間あれば、たくさんの事が出来る。色々な事が――例えば完璧な詩を書くとか、悟りが開けるような本を読むとか。それなのに――寄り掛かっていた、埃ぽいクッションの匂いに胸がむかむかしてきた。

2時間。120分。これだけあれば何か出来る。何かが。いや何も出来ない。ああ、今まで何百時間という時間があったのに、それをどうしていたんだろう？無尽蔵の水槽を持っているみたいに、貴重な時間を無駄にし、こぼしてしまったのだ。デニスは心の中で呻き、今までの仕事を思い出して徹底的に自分を責めた。どんな権利があって、陽の当たる3等列車に乗っているのか。どんな権利があって、生きているのか？何もない。権利なんかない。

惨めな言いようのない悲しみが彼を捉えた。23才。ああ、苦しいくらいその事実を意識していた。

汽車は，どしんと音がして止まった。キャムレットだ。デニスは立ち上り帽子を目深にかぶり、積み上げた荷物を崩し窓から顔を出してポーターを呼んだ。そして、両手にバックを持ったが、ドアを開けるのにもう一度下に置かなければならなかった。やっと無事に

荷物を持ってプラットホームに降り立つと、今度は手荷物車の方に走って行った。

「自転車、自転車！」と息ををきらしながら車掌に言った。活動家みたいだなと思った。車掌は知らん顔をして、キャムレット行きの荷札の付いた荷物を一つづつ順序よく渡していた。「自転車！」とデニスは繰り返した。「緑色の、車体の枠が十字になっているやつだ。名前はストーンだ。スペルは、S・T・O・N・Eだ。」

「もう直ぐですよ」と車掌はなだめるように言った。海軍髭の大柄で堂々とした男だった。この男が、家でたくさんの家族に囲まれてお茶を飲んでいる光景が想像できた。子供達がうるさいと、こんな調子で言うのだろう。「もう直ぐです。」活動家のデニスは、つぶれて、ぺちゃんこになってしまった。

荷物は後で取りに来ると言って、自転車で出かけた。田舎に来る時には、いつも自転車を持って来る。運動のためだ。いつか朝6時に起きて、ケニルワース[2]かストラットフォード・オン・エイボン[3]あたりに自転車で行くことがあるかもしれない。それに昼からちょっと遠出をすれば、半径20マイル以内で、ノルマン様式[4]の教会やチューダー様式[5]の屋敷が見られる。何故かまだ一度も見ていなかったが、それでも自転車が手元にあって、いつか天気のいい日に朝6時に起きるかもしれないと考えると楽しかった。

キャムレット駅から上り坂になっている長い丘の頂上に立つと、気持ちが高まっていくのがわかった。世界は美しいと思った。遙か向こうの青い丘、尾根の斜面にある白っぽい収穫物、走るにつれて変化する一本の木もない地平線――そうだ、何もかも美しい。下方の尾根の横腹をえぐったように深く湾状になっている谷の美しさに圧倒された。曲線、曲線。気持ちを表わす適当な言葉を見つけようと、ゆっくりと何度もこの言葉を繰り返した。曲線――駄目だ。空中から、出来上がった言葉を掬い上げるように手を動かし、ほとんど自転車から落ちそうになった。この小さな谷の曲線を言い表す言葉は何だろう？人間の体の線のように美しい、芸術の微妙な美しさにあふれている…

「ガルブ[6]」、いい言葉だ。しかしフランス語だ。「ル・ガルブ・エバゼ・ド・セ・ザンシュ[7]」、こんな言葉が出てこないフランス小説などあるだろうか？いつか、小説家のための辞書を編纂しよう。「ガルブ」、「ゴンフレ[8]」、「グーリュ」、「パルファン」、「ポー」、「ペルヴェル」、「ポトレ」、「ピュダール」、「ヴェルティエ」、「ヴォリュプテ」。

しかし、ぴったり合う言葉を見つけなければ。曲線、曲線…この谷の曲線は女性の胸でかたどった茶碗の線のようだ。巨大な神がこの丘で体を休め、そのあと出来た窪みみたいだ。厄介な言い回しだ。しかしこう言いながら、自分の言いたい事に近づいていると思った。「窪み」、「小波」、「さざ波」――彼の心はだんだんポイントを外れて、類韻と頭韻のこだまする廻廊をさまよって行った。言葉の美しさに心を奪われていた。

再び外の世界に気が付くと、下り坂に来ていた。道は険しく真直ぐで、かなり大きな谷に向かって急勾配になっていた。反対側の斜面の、谷より少し高くなっている所に目的地

のクローム屋敷があった。ブレーキをかけた。屋敷の眺めは素晴らしく、去り難かった。3本の先の尖った塔のある正面が、庭の黒い木々の間から突き出ていた。屋敷は太陽の光を一ぱいに浴び、古いレンガはバラ色に輝いていた。何と豪華で堂々としているのか。何と美しいのか。それに何と厳粛なんだろう。坂はますます険しくなっていた。ブレーキをかけているのにスピードが増した。レバーを緩めた途端、勢いよく降りて行った。5分後には大きな中庭の門を通っていた。玄関は開いていた。自転車を壁に立て掛けて中に入って行った。皆をびっくりさせるつもりだった。

第2章

誰もびっくりさせる事は出来なかった。誰も居なかったのだ。あたりは閑としていた。デニスは見慣れた絵や家具、あちこちに散らかっているこまごまとした人の気配を示すものを楽しそうに見ながら、部屋から部屋へと歩き回った。皆が外出していてよかったと思った。人気のない屋敷の中を歩き回るのは、廃墟の町ポンペイを探検するみたいで楽しかった。探検家は、これらの遺跡からどんな生活を復元するのだろうか。この誰もいない部屋にどうやって人間を住まわせるのだろうか。長い廊下[9]には、立派で（大きな声では言えないが）どちらかと言えば退屈なルネッサンス以前のイタリア絵画、中国の彫刻、慎え目でいつの時代のものか分からない家具が並んでいた。応接室には大きな更紗のかかったひじ掛け椅子があり、厳粛で禁欲的な美術品の中では一種の憩いの場所となっていた。昼間の居間の壁は、クリーム色でベニス風の椅子とロココ朝のテーブル、鏡、近代絵画があった。書庫はひんやりと広々として暗く、床から天井まで本が並び、物々しい二つ折本がたくさんあった。食堂には大きなマホガニーのテーブル、18世紀風の椅子とサイドボード、18世紀風の絵――家族の肖像画、動物の細密画があり、どっしりとしていて色調もワインレッドで英国風だった。これらから、どんなものを復元するのだろうか？長い廊下と書庫は、ヘンリー・ウィンブッシュ氏好みだし、昼間の居間は、アン好みだった。しかしこれだけだった。十代にも渡って集められたものの中で、人間はほんのわずかしかその痕跡を残してはいなかった。

昼間の居間のテーブルの上に、彼の詩集が置いてあった。何て気転がきくんだろう！手に取って開いてみた。批評家が「軽装本」と呼ぶものだった。目に留まった所を読んでみた。

「…しかし、沈黙と果てしない暗闇が
ルナ・パークの光の中に弧を描き、
夜の暗闇から生まれたブラックプールは

明るく騒然とした墓穴を掘る」

本を置き頭を振り溜息をついた。「あの時は、何て才能があったんだろう」と老スイフトを真似ながら考えた。この本が出版されて6か月になる。同じようなものは二度と書かないと考えると嬉しかった。誰がこれを読んでいたんだろう。恐らくアンだろう。そう思いたかった。きっと、ポプラの若木の木の精の中に彼女自身の姿を見たのだろう。風になびくほっそりとした木の精の中に。「木が生まれ変わった女」というのがその詩の題だった。本が出た時、自分では言えない事をその詩が言ってくれればと、彼女に一冊あげたのだった。しかし彼女は一度もその事に触れた事はなかった。

目を閉じ、ロンドンで時々一緒に食事をしていた小さなレストランに赤いベルベットのコートを着て、颯爽と入って来た時の彼女の姿を思い描いた——45分も遅れてきた。彼の方は不安と怒りと空腹でうんざりしていたのだ。何ていまいましい女なんだ！

突然、彼はこの屋敷の女主人が彼女の部屋に居るかもしれないと思った。あり得る事だ。行って見てみよう。ウィンブッシュ夫人の部屋は庭の前の中央の塔の中にあった。小さな螺旋階段が玄関からついていた。デニスは階段を上りドアをノックした。「どうぞ」という声がした。やはりここに居たのだ。いない方がよかったのに。ドアを開けた。

プリシラ・ウィンブッシュは、ソファーに横になっていた。吸取紙を膝の上に置いて銀の鉛筆の端を思案顔でなめていた。

「あら」顔を上げて言った。「あなたが来るのを忘れていたわ。」

「残念ながらお伺いしましたよ」デニスはとがめるように言った。「本当にすみません。」

ウィンブッシュ夫人は笑った。彼女の声も笑いも低く男性的だった。全てが男性的だった。顔は大きく四角く中年の顔で、大きな鼻は突き出ていて、目は緑がかって小さかった。その顔の上に奇妙な、本物とは思えないようなオレンジ色の高く上手に結い上げられた髪がのっていた。彼女を見ると、デニスはいつも歌姫に扮したウィルキー・バード[10]を思い出しす。

「だから　私は、
オペラで歌う、オペラで歌う、
オップ・ポップ・ポップ・ポップ・ポペラで歌う」

今日の彼女は襟の高い紫色のシルクの洋服と真珠のネックレスをしていた。豪華で皇族を思わせるその衣装のため、いつもより一層、舞台にいるように見えた。

「最近は何をしていたの？」彼女が聞いた。

「ええ」とデニスは嬉しそうに口ごもった。頭の中ではロンドンでの面白い話が、すっか

り熟していた。口に出すと楽しいだろう。「まず初めに」と彼は言った...

しかし遅すぎた。ウィンブッシュ夫人の質問は、文法学者が修辞的疑問[11]と呼ぶ類のものだったのだ。答えを求めているのではなかった。会話を豊かにする、社交の手なのだ。

「私、星占いで忙しいのよ」彼女は邪魔をした事に気付かないで言った。

ちょっとがっかりして、この話はそれを聞いてくれそうな人のためにとっておこうと思った。仕返しのつもりで「へえ、そうですか」とかなり冷淡に言った。

「今年のグランド・ナショナル[12]で400ポンド儲けた話したかしら？」

「ええ」とあい変わらず冷淡に無愛想に答えた。少なくとも６回は聞かされた。

「すごいでしょ？何もかも星のお蔭よ。『昔』は星の助けがなかったから数千ポンドも損をしてたのよ。でも今は」――ちょっと言葉をきって――「グランド・ナショナルで400ポンドよ。星のお蔭だわ。」

デニスは、その『昔』についてもっと聞きたかった。しかし控え目で恥ずかしがり屋の彼にはできなかった。破産しそうになったことがあったのだ。知っているのはこれだけだった。昔のプリシラ――今程年もとってはいなかったし、元気でもあったが、――は、国中の競馬で手一ぱい、帽子一ぱいの金をすったのだ。賭博もした。金の額は噂によって違っていたが、高額だという事だけは確かだった。ヘンリー・ウィンブッシュ氏は、ルネッサンス以前のイタリア絵画――タデオ・ダ・ポッギボンシやアミコ・ディ・タデオの絵や、４～５枚の無名のシエナ[13]派の絵――をアメリカ人に売らなければならない程だった。危なかった。人生で始めてヘンリーは、自分の意見を主張した。結果はよかったらしい。

プリシラの楽しく遊び回っていた生活は突然終わった。今では病気とも言えないような病気でほとんどクローム屋敷で過ごしている。気晴らしに『新思想』[14]とオカルトに凝っていた。競馬に対する情熱はまだ残っていたし、ヘンリーは元々優しい男だったので彼女が月に40ポンド賭ける事を許していた。一日の大半を星占いで競馬の予想をして過ごし、星が示す通りに賭けた。フットボールにも賭け、大きなノートに全選手の星座を書き留めていた。両チームの選手の星座を突き合わせて、占っていくのはとても微妙でむつかしかった。スパーズとヴィラの試合は星座上では非常に広大で複雑に入り組んでいるので、時たま結果を間違えたとしても不思議はなかった。

「こういったものを信じないとは残念ね、デニス」ウィンブッシュ夫人は低いはっきりした声で言った。

「さあ。」

「まあ、信仰がどんなものか知らないから、そんな事言うのよ。一度信じたら、人生がどれ程楽しく面白いか、あなたには分からないのよ。どんな事にだって皆、意味があるのよ。無意味なものは何もないの。人生を楽しいものにしてくれるのよ。ここでの生活は退屈だと思っているんでしょ？でも私はそうは思わないのよ。『昔』の事を悔やんでなんかいない

わ。星がついているんですもの…」吸取紙の上にあった一枚の紙を手にとって「インマン選手の星座よ」と説明した。「(この秋はビリヤードの選手権でちょっと遊ぼうと思っているのよ。)『無限』と調子を合わさなければいけないの」と手を振った。「それに来世や霊魂や霊気、エディ夫人[15]もいるし、病気じゃないって唱える[16]のもあるし、ベザント夫人[17]もいるのよ。何もかも素晴らしいわ。少しも退屈なんかしないわ。『昔』は——どうやって暮らしていたのかしらね。楽しみ?——走り回っていただけよ。昼食、お茶、夕食、お芝居、夜食の毎日。勿論続いている間は楽しかったわ。でもその後には何も残らないの。バーベキュー・スミス氏の新しい本にその事について面白い事が書いてあったわ。どこにあったかしら?」

彼女は体を起こして、ソファーの側のテーブルに置いてある本に手を伸ばした。

「ところで彼を御存知?」と彼女が尋ねた。

「誰ですか?」

「バーベキュー・スミス氏よ。」

デニスは何となく知っていた。日曜新聞で名前を見た事があった。処生術について書いていた。『若い女性が知るべき事』という本の著者でもあったかもしれない。

「個人的には知りません」と彼は言った。

「来週の週末に彼を招待しているのよ。」彼女はページをめくった。「ここよ、印をつけておいたの。気に入った所にはいつも印をつけることにしているの」と言った。

幾分老眼だったので、ほとんど腕の長さの所まで本を離して、ゆっくりと芝居がかった調子で読み始めた。

「『1000ポンドの毛皮のコートが何だ、25万ポンドの収入が何なのだ?』」頭を女優のように動かして本から顔を上げた。オレンジ色の髪が揺れた。デニスは魅せられたようにそれを見た。ヘンナ染料で染めたのだろうか。それとも広告などでよく見る鬘だろうか?

「『玉座や王笏が何だ?』」

オレンジ色の鬘——そうだ、鬘に違いない——がまた動いた。

「『富める者、権力者の栄華、名門の誇り、上流社会の華麗な快楽が何だ?』」

尋ねるように文章から文章へ調子を上げていったその調子が、突然下り答えに入った。

「『何でもない。虚栄だ、風に吹かれるタンポポの種、薄く立ち登る熱気のようなものだ。大切な事は全て心の中で起こる。目に見えるものは美しいが、目に見えないものの方が数千倍も大切だ。人生において大切なものは目に見えないものである。』」

ウィンブッシュ夫人は本を置いて、「素晴らしいでしょ?」と言った。

デニスは意見を言わない方がいいと思い「ふん」とだけ言った。

「本当に立派な本よ。すごい本だわ。」プリシラは親指でページをパラパラめくりながら言った。「それに蓮の池についての一文があるの。『魂』を『蓮の池に』喩えているのよ。」

再び本を取り上げ読み始めた。「『私の友人は庭に蓮の池を持っていた。それは野バラに囲まれた小さな谷にあってその間をナイチンゲールが夏中愛の歌を歌っている。池の中には蓮の花があり、鳥が水を飲んだり水浴びをしにやって来る…』ああ、これを読んで思い出したけど」とプリシラは音をたてて本を閉じ大声で笑いながら言った――「この間あなたが帰った後、プールで起きた事を思い出したのよ。村の人達に夕方ここで水浴びをしてもいいと言ったの。どんな事が起きたか分かる？」

彼女は前かがみになって内緒話をするように囁いた。時々喉をならして笑った。「…混浴だったの…この窓から見えたの…確かめようと思って双眼鏡を持ってこさせたの…間違いなかったわ…」再び大笑いした。デニスも笑った。バーベキュー・スミス氏は床にほおり投げられた。

「お茶の準備が出来たかどうか見に行きましょう」とプリシラは言った。ソファーから起き上がり絹ずれの音をさせて部屋を横切って出て行った。デニスはハミングしながら彼女の後に続いた。

「だから　私は
オペラで歌う、オペラで歌う、
オップ・ポップ・ポップ・ポペラで歌う。」

そして最後に「ラ・ラ」というくるくる回るような伴奏をつけた。

第3章

屋敷の前のテラスは長くて狭い芝生になっていて外側は優雅な石の手摺で仕切られていた。両側にはレンガ造りの小さなあずまやが2つあった。屋敷の下の地面は急傾斜していてテラスはとても高かった。手摺から、傾斜している芝生までは30フィートの直下距離があった。下から見ると屋敷と同じレンガ造りの高い果てしなく続くテラスの壁は、威嚇的な要塞といった感じだった――その城塞の胸壁から目と同じ高さの景色が見えた。眼下の前景には、石で縁どられたプールがあり彫刻を施されたどっしりとしたイチイの木の林で囲まれていた。その向こうには、がっしりとした楡の木や緑の草原で囲まれた大邸園が延び、谷の下には狭い川が流れていた。川の向こうの土地は再び長い上り坂になっていて開墾地が基盤の目のようになっていた。谷の右側を見上げると青い遠くの山々が見えた。

お茶のテーブルが，小さなあずまやの一つが作る蔭になった所に置いてあり、デニスとプリシラが姿を現した時には他の人達は皆集まっていた。ヘンリー・ウィンブッシュがお茶を入れ始めていた。彼は50才は越えているが30才にも見え、また何才といっても差し支

えないくらいで一向に年をとらないように見えるタイプの男だった。デニスは昔から彼を知っていた。この何年間、彼の青白いどちらかといえば立派な顔は少しも年をとっていなかった。冬も夏もかぶっている薄いグレーの山高帽子のように年をとらず穏やかで落ち着いて無表情だった。

彼の隣には、といっても耳が不自由という難攻不落の砦のため、彼からも世間からも隔離されているジェニー・マリオンが座っていた。恐らく30才位だろう。傾いた鼻、ピンク色の膚をし、茶色の髪は2つの丸い菓子パンみたいに耳の上に編んで巻いてあった。耳の聞こえないという秘密の塔に坐り、何かを見透す鋭い目で世間を眺めているのだ。男や女や物事をどう思っているのか。デニスには決して分からないものの一つだった。謎のように分からないジェニーは人を不安にさせる。今もにこりと笑っているところを見ると、何か冗談でも楽しんでいるのだろう。茶色の目は丸くきらきら光るおはじきみたいだった。

ウィンブッシュ氏の向う隣ではメアリー・グレースガードルの真面目でお月様みたいな無邪気な顔が、ピンク色に子供っぽく輝いていた。23才近かったがそうは見えなかった。小姓のように短く切った髪が、しなやかな金の鐘のように頬の回りに垂れていた。大きく青い陶器に似た目をし、その表情はあどけなく頭を絞って真剣に考える様子をする時があった。

メアリーの隣には、小さなやせた男がしゃちこばって背をぴんと伸ばして坐っていた。外見的にはスコーガン氏は、絶滅した第三紀の鳥トカゲのようだった。鼻はくちばしに似ていて黒い目はこま鳥みたいにすばしっこくきらきら光っていた。しかし、柔らかさ、優雅さ、羽毛のようにふさふさした感じはなかった。皺のある茶色っぽい顔は、かさかさのうろこのようで手は鰐の手みたいだった。動作は、トカゲに似ていてぜんまい仕掛けのように突然動いて人をびっくりさせる。声は細く笛のように乾いていた。ヘンリー・ウィンブッシュ氏の学生時代の友達で同い年だが、スコーガン氏の方がずっと老けて見える。しかしその反面、グレーの山高帽子のような顔をした穏やかなこの貴族より遙かに若々しい活気があった。

スコーガン氏は絶滅したトカゲに似ていたが、ゴンボールドは全く本質的に人間的だった。旧式の30年代の博物学においては、『人間』の典型として銅版彫刻に描かれていたかもしれない——当時はその名誉は普通、バイロン卿に与えられていたが。実際もう少し髪が多くて首が細かったらゴンボールドは完全にバイロン的だったろう——いやバイロン以上だったかもしれない。というのは、ゴンボールドはフランスのプロバンス地方の出で、真白な歯と大きな黒い目、黒髪の30才の若い海賊だったのだから。デニスは羨ましそうに彼を見た。彼の才能に嫉妬していた。ゴンボールドが絵を描くみたいに詩を書く事ができれば！その上今は、ゴンボールドの外見、活気、自信家ぶりにも嫉妬していた。アンが彼を気に入っているだって？好きだって？——それ以上かもしれないと、デニスはプリシラと

長い芝生のテラスを歩きながら苦々しく思った。

二人がテーブルの方にやって来た時、ゴンボールドとスコーガン氏の間に置かれていたかなり低いデッキチェアーは、二人に背中を向けていた。ゴンボールドはその椅子にかがみ込んで楽しそうに、にっこりしたり笑ったり手を動かしたりしていた。椅子の方から、優しい物憂げな笑い声がした。それを聞いてデニスはびっくりした。あの笑い――よく知っている！彼の中で感情がかき立てられた。歩みを早めた。

背の低い椅子の中でアンは座るというよりむしろ横になっているようだった。長くほっそりとした体を、気怠そうに物憂げな様子で横たえていた。薄い茶色の髪に囲まれた顔はまるで人形のように美しく整っていた。実際人形かと思うような時があった。卵形の顔、長いまつ毛の青い目が無表情になるのだ。気怠そうな蠟の仮面になってしまう。彼はヘンリー・ウィンブッシュ氏の姪で、あの山高帽子のような顔はウィンブッシュ家のものだ。女性の場合には、無表情な人形のような顔になってしまうのだ。しかしこの人形のような顔に、一番下の変わらない低音の上を陽気なメロディーが流れるように、アンのもう一つの遺伝が現れるのだった。――生き生きとした笑い声、軽い皮肉な笑いとくるくるかわる表情だった。彼女を見下ろした時、彼女はにっこり微笑んでいた。デニスは理由もなく『猫の微笑』と呼んだ。口を堅く結び頬に小さな皺が出来ている。わずかばかりの意地悪そうな笑いが、その皺、半ば閉じた目の回りの皺、そして細めたまぶたの間で笑っている目の中に潜んでいた。

おざなりの挨拶をしてデニスはゴンボールドとジェニーの間に席を見つけて坐った。

「御気嫌いかがですか、ジェニー？」と叫んだ。

ジェニーは自分の健康に関しては、公けに言えない秘密でもあるように黙ってうなずき、謎めいた微笑を浮かべていた。

「私が帰ってからのロンドンは如何でした？」とアンが椅子の下から尋ねた。

待ちに待った時が来た。とても面白い話が口から出るのを待っていた。「ええ」とデニスは嬉しそうに微笑んで言った。「まず初めに…」

「プリシラは、あなたに好事家好みの堀出し物の話をしましたか？」とヘンリー・ウィンブッシュ氏が体を乗り出して言った。最も有望な蕾が摘まれてしまった。

「まず初めに」とデニスは絶望的な気持ちになりながら「バレーを見ました…」と言った。

「先週」とウィンブッシュ氏は静かにそして容赦なく続けた。「50ヤードの樫の木の排水管を発掘したんだよ。真中に穴のあいた木の幹だったが、とても面白かった。15世紀の修道僧が敷いたものかどうか…」

デニスは憂鬱そうに聞いていた。「すごいですね」とウィンブッシュ氏が言い終えた時言った。「本当にすごいですね。」ケーキをもう一切取った。もうロンドンの話をしたいとさ

え思わなかった。しょげてしまった。

しばらく前から、メアリーの真面目な青い目が彼に注がれていた。「最近は、何を書いていらっしゃるの？」と彼女が尋ねた。文学的な話をするのは楽しいものだ。

「韻文や散文です」とデニスは言った。「ちょっとした韻文や散文です。」

「散文だって？」とスコーガン氏が、相手をびっくりさせるような勢いでその言葉に飛びついてきた。「散文を書いているんですか？」

「ええ。」

「まさか小説ではないんでしょうね？」

「いえ小説です。」

「ああ、何てことだ、デニス」とスコーガン氏は叫んだ。「どんなものです？」

デニスはかなり不快になってきた。「普通のものです。」

「成程」とスコーガン氏は唸った。「あなたのために一つ話を作ってみましょう。主人公のパーシーは、子供の頃はゲームが得意ではなかったが頭はよかった。普通のパブリック・スクールと大学を出てロンドンに行き、そこで芸術家の仲間入りをする。憂鬱な思想に打ちひしがれ、両肩に全宇宙を背おっているような気になっている。才気あふれる立派な小説を書き、上品に『恋愛』を楽しみ小説の終りには輝かしい未来の中に消えてしまう。」

デニスは赤くなった。スコーガン氏の話はびっくりするくらい正確だった。デニスは笑おうとした。「間違っています」と彼は言った。「僕の小説はそんなんじゃありません。」大胆な嘘だった。幸いまだ2章しか書いていなかった。夕方荷物をほどいたら、破ってしまおうと思った。

スコーガン氏は、構わず続けた。「君達若者は、どうして青年や芸術家の心理などという面白くもない事を書くのかい？専門家の人類学者だったら、時にはオーストラリアの原住民の信仰の研究から、大学生の哲学的関心に転向するのもいいかもしれない。しかし私のような普通の大人が、そんな精神的苦悩の話に感動する訳がないじゃないか。それに結局のところ、イギリス、ドイツ、ロシアでは若者より大人の方が多いんだから。芸術家というのは普通の大人とは全く違った問題――私のような人間の頭には浮かびもしない純粋美学の問題に夢中になっているんだから、芸術家の心理は、普通の読者にとっては純粋数学の問題と同じで退屈なものなんだよ。芸術家を芸術家として書いた真面目な本は退屈だよ。それに芸術家を、恋人、夫、アルコール中毒者、英雄などとして書いた本は、書く事にも価しないね。漫画雑誌のコミック・カットに出てくるラジウム教授が科学者の典型なら、ジャン・クリストフが文学作品の典型だね。」

「僕がそんな面白くない人間だとはあんまりですね」とゴンボールドが言った。

「そんな事はありませんよ、ゴンボールドさん」とスコーガン氏は急いで説明した。「恋人あるいはアルコール中毒者としては、非常に面白い人だと思っていますよ。しかし、物

の形を組み合わせる人間としては退屈だと認めるべきですよ。」

「私はそうは思わないわ」とメアリーが叫んだ。彼女は話をする時にはいつも息が切れ、小さな喘ぎが言葉の切れ目になる。「私はたくさんの芸術家を知っているし、彼らの心理はとても面白いと思うわ。とくにパリでは。例えばチャプリッキーなど——この春、パリでチャプリッキーの絵をたくさん見たけど…」

「ああ、あなたは例外です、メアリー、あなたは例外です」とスコーガン氏は言った。「あなたは、『すぐれた女性だから』。」

嬉しそうにパッと赤くなったメアリーの顔は、仲秋の満月みたいだった。

第4章

翌朝デニスが目を覚ました時には、太陽が照り空は澄みきっていた。白のフランネルのズボンを着ようと思った——白のフランネルのズボンと黒のジャケット、それに絹のシャツと新しい薄いピンク色のネクタイにしよう。靴はどれにしようか。白い靴が一番合う。しかし黒のエナメルの方が楽しそうな気がした。こう考えながらしばらくベットの中にいた。

下に降りて行く前に——最終的に選んだのはエナメルの靴だった——鏡に写して入念にチェックした。髪がもう少し濃い金髪だったらなあと思った。実を言うと、彼の金髪はわずかに緑がかかっていた。しかし額は申し分ない。顎が出張っていないところを額の高さが補っていた。鼻がもう少し高かったら、まあこれは見逃そう。目は緑でなく青だったらなあ。パッドが控え目に入った上着はよく仕立ててあり、実際よりがっちりして見えた。白いズボンの足は長く上品だった。満足して階段を降りて行った。他の人達はすでに朝食を終わっていて、ジェニーと二人だけだった。

「よくおやすみになれましたか」と彼は言った。

「ええ、いいお天気じゃありません？」とジェニーは二度すばやくうなずいた。「でも先週はひどい雷雨でしたのよ。」

真直ぐな並行線は無限の彼方でしか接触しないのだろうかと、デニスは思った。彼はいつまでも心地よい眠りについて、そして彼女の方は天気の事を話し続けるのかもしれない。我々は誰かと接触する事があるのだろうか。皆並行線だ。ただジェニーは、耳が悪いので他の人よりよけい並行線になってしまう。

「あの雷雨には本当に驚きました」と彼はポリッジを取りながら言った。「そうは思いませんでしたか？それとも肝をつぶす程でしたか。」

「いいえ、嵐の時はいつも寝ているんです。横になっている方がずっと安全ですから。」

「どうして？」

「だって、稲妻は水平ではなく下向きに走るんです。だから横になっていると電流は流れないんですよ」と絵を描くような仕草をした。

「それはすごい。」

「本当よ。」

沈黙があった。デニスはポリッジを食べ終わりベーコンを取った。これ以上何も言う事はなかった。ふとスコーガン氏のあの馬鹿げた言葉が頭に浮かんだので尋ねてみた。

「あなたは御自分の事を『すぐれた女性』だと思いますか？」ジェニーにその意味を分からせるため何回も繰り返さなければならなかった。

「いいえ」とデニスは言った。「スコーガン氏はメアリーがそうだと言っていましたよ。」

「彼が？」とジェニーは声の調子を落として言った。「私、あの人少し陰険だと思ってます。」

こう言うと完全に黙ってしまった。デニスはこれ以上ジェニーに何かを言わせる事も、耳を傾けさせる事もできなかった。彼女はただ、にっこり微笑んで時々うなずくだけだった。

デニスはテラスに出て煙草を喫い新聞を広げた。一時間経ってアンがやって来た時には、まだ新聞を読んでいた。宮廷報告[18]と結婚予告の記事の所だった。芝生を横切ってやって来たアンを立ち上がって迎えた。白いモスリンの服を着た木の精だ。

「まあデニス、その白いズボンとても可愛いいわ」と彼女は叫んだ。

デニスはどきっとした。言い返す事が出来なかった。「新しい洋服を着た子供扱いですね。」少しいらいらして言った。

「だってそう思ったんですもの、デニス。」

「ではそう思わないで下さい。」

「そんな事出来ないわ。私、あなたより年上なんですもの。」

「よくそんな事が言えますね。たった4つじゃありませんか。」

「白いズボンがとても可愛いのに、どうしてそう言ってはいけないの？それに可愛いく見えないと思っているんだったら、どうしてそれを着たの？」

「庭に出ましょう」とデニスは言った。困ったと思った。会話が思いがけない方に向いてしまったのだ。もっと違った始まりを考えていたのに。「今朝はステキですね」といった類の言葉で口火を切るつもりだった。すると彼女は、「私が？」と答える。そして意味ありげな沈黙。それなのにまず彼女がズボンの事を言い出してしまった。癪にさわる。プライドが傷つけられてしまった。

テラスの端からプールに向かって傾斜している庭のその部分には、色や形にとらわれない美しさがあった。昼も夜も美しかった。銀色に輝く水面、四季を通じてある黒いイチイの木、西洋ヒイラギの木がこの景色の主な特徴となっていた。黒と白の景色だった。プー

ルの片側には花壇があり、イチイの木で出来た巨大なバビロニア風の壁が境になっていた。生垣を通って壁にあるくぐり戸を開けると、突然、鮮やかな明るい色の世界に出て来る。7月の花々が太陽の下で光り輝いている。高いレンガの壁の内側の庭は、まるで暖かさと香りと色彩の水槽のようだった。

デニスはアンのために小さな鉄のドアを押し開け「回廊から東洋の宮殿に出て来たみたいですね」と言って強い花の香りを深く吸い込んだ。「『香りの中で炎は舞う…』」どう続くのでしたか？

「『射て、消防士達よ！
炎は何となだらかにアーチを描いているのか
耳は鋭い轟音を語る事はできない
しかし目には写る、そして香りは...』」

「意地悪ね」とアンは言った。「内容も作者も知らないのに、恥をかかせるつもり？」

デニスは謝った。「教育の欠点ですよ。物事が少し現実的で生き生きとして来るのは、その物事に関する誰かの出き合いの言葉をそれに当てはめる事ができる時なんです。それに色々な言葉があります——例えば『キリスト単性論者』[19]など。こういった言葉を勝ち誇ったように持ち出して、その言葉の不思議な響きで議論に片を付けたつもりになるんです。これが大学教育というものです。」

「自分の教養のある事を悔やんでいるのね」とアンは言った。「私は足らないのが恥ずかしいわ。あのひまわりの花を見て。素晴らしいわ。」

「黒と黄色——エチオピアでは王様だ。シジュウカラ[20]が、ひまわりにくっついて種を摘み出す様子が好きだなあ。それに較べて他の粗野な鳥は、餌をがつがつ食べながら、羨しそうに見上げている。『羨しそうに見上げている』だって？文学的だな。また教養が出た。いつもこうなってしまう。」彼は黙ってしまった。

アンは古いりんごの木の下でベンチに腰を下した。「お話聞いているのよ」と言った。

彼は立ったままベンチの前を行ったり来たりしながら、手振り身振りを交えて話した。「本を」と彼は言った。「僕達は、たくさんの本を読む。しかし人間や世の中の事はほとんどわからない。宇宙、人間精神、論理学の本が一体どのくらいあるか、あなたにはお分かりにならないでしょう。僕はこの5年間で20～30冊の本を読みました。20冊。そして僕達はその重さに耐えかねて世の中に押し出されるんです。」

彼は行ったり来たりした。声の調子を上げたり下げたり一瞬黙ったりして話し続けた。時々手や腕を動かしたりもした。アンは講義を受けているみたいに静かに聞いていた。彼はステキな子だわ、それに今日はとても可愛いく見える——可愛いく。

僕達はあらゆる物事について出き合いの観念を抱いて世の中に出ると、デニスは続けた。それぞれ哲学を持ち人生をそれに当てはめようとする。まず生きるべきだ。そして次に哲学を人生に当てはめるべきだ…人生、真実、物事は恐ろしいくらい複雑だ。一番むつかしいと思っていた観念さえ簡単になってしまう。観念の世界では明白だった。人生では全てが漠然としていて複雑だ。僕達は惨めでひどく不幸ではありませんか？デニスはベンチの前にやって来て立ち止まり、この最後の質問をした時腕を差し出し十字架にかけられたように、一瞬棒立ちになった。そして腕を脇腹にもっていった。

「まあ、可愛相なデニス！」アンは胸を打たれた。白いフランネルのズボンをはいて目の前に立っているデニスは本当に哀れだった。「でもどうしてこんな事で苦しむのかしら？わからないわ。」

「スコーガン氏のようですね」とデニスは苦々しそうに叫んだ。「あなたは僕を人類学者の見本と考えているんですね。ええ、自分でもそう思います。」

「いいえ」と彼女は言ってスカートをひっぱり横に坐るよう勧めた。彼は腰をおろした。「どうして物事を当然のあるがままに受け入れないの？」と彼女は尋ねた。「その方がずっと楽なのに。」

「勿論そうです。でも徐々に知っていく事が勉強なんです。まずあの20冊の本を捨てていくんです。」

「私はいつも物事をあるがままに受け入れているわ」とアンは言った。「楽しい事を楽しみ、嫌な事は避けるの。それだけよ。」

「あなたにとっては何でもない事かもしれません。あなたは生まれながらの異教徒なんです。僕はそうしようと努力はしているんですが、物事をあるがままに受け入れ楽しむ事は出来ません。美、快楽、女――楽しいものに対してそれが楽しいと口実を作り正当化しなければいられないんです。そうしなければ安心して楽しめないんです。美について一つの話を作り上げ、それには真実と善が関係していると主張します。芸術は無秩序から神聖な現実を建て直す過程だと言わなければいられません。快楽は無限との結合への神秘的な道の一つです――酒、踊り、愛による快楽。女性は神性への道だと思っています。愚かさを通して色々な物事をやっと見始めたばかりだというのに！こんな恐ろしい事を避けている人がいるなんて信じられません。」

「そんな事の犠牲者になっている人がいるなんて私には、もっと信じられないわ」とアンは言った。「私は男性が神性への道だと考えたいわ」とアンが言った。いたずらっ子のような笑いが口元に浮かび、半ば閉じた目は笑っていた。「デニス、あなたに必要なのはステキな太った奥さんと固定収入、それにあなたに合った規則的な仕事だわ。」

「僕に必要なのはあなたです。」これが言い返すべき事だった。どうしても言いたい事だったのだ。でも言えなかった。恥ずかしさと戦った。「僕が必要としているのは、あなたで

す。」心の中で叫んだ。しかし口からは出て来なかった。彼女の方を諦めたように見た。僕が何を言おうとしているのか、彼女には分からないのか。理解できないのだろうか？「必要なのは、あなたです。」そう言いたかった。言いたいと思った。

「中に入ってシャワーを浴びるわ」とアンが言った。「とても暑いんですもの。」チャンスは過ぎてしまった。

第5章

ウィンブッシュ氏は、皆を『家庭農場』の見学に連れて行った。総勢6人――ヘンリー・ウィンブッシュ、スコーガン氏、デニス、ゴンボールド、アン、そしてメアリー――は、養豚所の低い壁の横に立って豚小屋の一つを見ていた。

「これは立派な雌豚なんですよ」とヘンリー・ウィンブッシュが言った。「14匹も産んだんです。」

「14匹も？」とメアリーが信じられないという風に繰り返した。彼女はびっくりした青い目をウィンブッシュ氏に、それから小屋の中で動き回っている生命の躍進力に向けた。

大きな雌豚は豚小屋の真中に横たわり、2つの乳房で縁どられた丸く黒い腹は小さな茶色がかった黒い豚の攻撃にさらされていた。仔豚達は、ものすごい貪欲さで母親の脇腹をひっぱっていた。年老いた雌豚は時々落ち着かない様子で動いたり、小さな苦痛の声を上げた。一番小さな弱虫の豚は食事にありつく事が出来ず、金切り声を上げ、強い兄弟の中に割り込むか、母親の背中によじ登って乳房に近づくかしようとして走り回っていた。

「14匹いるわね」とメアリーが言った。「本当ね数えてみたの。すごいわ。」

「隣の小屋の雌豚は」とウィンブッシュ氏は続けた。「よくありません。5匹しか産みませんでした。もう一度チャンスをやろうと思っているんだが、もし、駄目だったら肥らせて殺すつもりです。あれが雄豚です。」向こうの小屋を指さした。「年はとっているが立派ですよ。でももう盛りを過ぎてしまった。あれも殺す事になるでしょう。」

「残酷だわ」とアンが叫んだ。

「しかし何て合理的で現実的なんだ」とスコーガン氏が言った。「この農場は健全な温情主義のモデルですね。育て働かせそして仕事や成長や繁殖が終ったら殺すんだから。」

「農場経営って俗悪で残酷なのね」とアンが言った。

デニスはステッキで雄豚の長い毛の生えた背中を掻き始めた。豚はその道具が届きやすいように体を動かした。やがてそこにじっと立ち満足したような声をたてた。長い間の泥が灰色の粉となって脇腹から剝がれ落ちた。

「何て面白いんだ」とデニスは言った。「誰かに親切にするって事は。この豚が掻いてもらって喜んでいるのと同じくらい、僕もこうして掻くのが楽しいんですよ。いつでもあま

り手間をかけずに親切にできればいいんだが…」

ドアがバタンとし重い足どりがした。

「お早よう、ロウリー」とヘンリー・ウィンブッシュが言った。

「お早ようございます、旦那様」と老ロウリーが答えた。この農場で働いている者の中で一番上品だった。——背が高く、がっしりとして腰も曲がっていなかった。白髪の頬髭、厳しい威厳のある横顔だった。真面目で物腰も立派なロウリーは、19世紀半ばのイギリスの政治家のような雰囲気をしていた。皆から少し離れたところに立ってしばらく豚を眺めていた。豚の鳴き声と泥の中で蹄がびしゃびしゃいう音だけが、その静けさを破っていた。やがてローリーは、ゆっくりと堂々と振り向いてヘンリー・ウィンブッシュに話しかけた。

「あれを御覧下さい、旦那様」とごろごろ転がっている豚を指さしながら言った。「正しくは豚と呼ばれます。」

「確かに」とウィンブッシュはうなずいた。

「あの男には参った」とスコーガン氏は老ローリーがゆっくり堂々と歩いて行ってから言った。「何という知恵だ、判断力だ、価値観だ！『正しくは豚と呼ばれます』そうだ、私はあれと同じ正当さで『正しくは人間と呼ばれます』と言いたいね。」

彼らは牛小屋と馬車の厩舎に向かった。天気のいい日に散歩していた5匹の鵞鳥に出会った。鵞鳥は一瞬ためらってガーガー鳴いた。蛇は、丁度かま首を持ち上げるように首を真直ぐ水平にして思い思いの方向に散らばって行った。赤い仔牛が広い庭の泥の中を歩いていた。別の囲いの中には機関車のように大きな牡牛がいた。とても温和しい牛で表情はどこか抜けた感じがした。赤茶色の目で皆を眺め、食べたばかりの食事を思い出すかのように口をもぐもぐ動かしていた。そして、その無感動な胴とは何の関係もなさそうに、しっぽを勢いよく左右に振っていた。短い角の間には濃い三角形の捲毛があった。

「すごい動物だ」とヘンリー・ウィンブッシュ氏は言った。「血統書付きだが、例の雄豚と同じで少々年をとって来た。」

「肥らせて、殺せ」とスコーガン氏は神経質な女性のように正確な発音で言った。

「お産を少しやめる事はできないのかしら」とアンが言った。「可愛相だわ。」

ウィンブッシュ氏は首を振った。「今まで1匹しか産まれなかったのに14匹も産まれて嬉しいんですよ。ありのままの生命の姿は気持ちのいいものですね。」

「そうおっしゃるのを聞いて嬉しいです」とゴンボールドが口を挟んだ。「多くの生命、それが必要なんです。私は繁殖が好きです。万物はできるだけ増え繁殖すべきです。」

ゴンボールドは興奮してきた。皆子供を持つべきだ——アンもメアリーも。何人も。彼はステッキで牡牛の横腹を叩きながら強調した。スコーガン氏はその知性をスコーガンの息子に、そしてデニスの子供に譲り渡すべきだ。牡牛は何事が起きたのかと振り向き、しばらくの間そのステッキを見ていたが、やがて何事もなかったかのように安心した表情で

向こうをむいた。不妊は嫌悪すべき不自然なもので生命に対する罪だ。生命、生命、生命。じっとして動かない雄牛の肋骨が響いた。

農場のポンプにもたれて皆から少し離れた所に立って、デニスは皆を観察していた。情熱的で元気なゴンボールドが中心だった。他の連中は輪になって話を聞いていた――ウィンブッシュ氏はグレーの山高帽子をかぶって静かで穏やかな顔をしている。メアリーは口を少し開け産児制限論信者としての怒りの目をし、アンは目を半ば閉じて笑っていた。そしてしゃちこばってまるで棒でも飲んだように真直ぐ立っているスコーガン氏の姿は、じっとしている時でさえ柔らかな動きを見せるアンの流動的な美しさと奇妙な対照を成していた。

ゴンボールドの話が終わり、メアリーは顔を赤らめ彼に反駁しようと口を開いた。しかし遅すぎた。一言も言わない内にスコーガン氏が口火を切ってしまった。横から一言の言葉を挟む事も出来なかった。諦めるより仕方なかった。

「ゴンボールド、君の雄弁でさえ」と彼は言っていた――「君の雄弁でさえ、世の中の人々を単なる繁殖の喜びの信仰に改宗させる事は出来ないんだ。蓄音機、映画、自動ピストルと共に応用科学の女神は世の中にもう一つの貴重な贈物をした――恋愛と生殖を切り離す方法だ。恋愛の神エロスはそれを望む人には完全に自由の神だ。ルキナ[21]との悲しむべき関係は意のままに断ち切る事ができる。2～3世紀の間には、完全に手を切る事ができるかもしれない。私は楽観的に期待している。エラスマス、ダーウィン[22]やリッチフィールド[23]の白鳥と言われたアンナ・シーウォード[24]が実験し――そして科学的熱心さにもかかわらず失敗した事を――我々の子孫が実験し成功するだろう。人工受精が自然の方法に代わり、広大な国営人口孵化器の中で受精卵のたくさん入った壜が、世界に必要な人口を供給するだろう。家族形態はなくなり、社会は根底から揺るぎ新しい基盤をつくらなければならなくなる。そしてエロスは太陽の降り注ぐ世界を美しく自由に花から花へと蝶のように飛び交う事ができる。」

「素晴らしいみたいね」とアンが言った。

「近い将来こうなるよ。」

いつもより一層真面目で驚いた感じのメアリーの青い陶器のような目が、スコーガン氏をじっと見ていた。「壜ですって？」と彼女は言った。「本当にそんな事考えてるの？壜だなんて…」

（注）

テキストは、Aldous Huxley, *Crome Yellow* (Harmondsworth, Penguine Books, 1974) を使用。

(1) Bole以下は架空の名前。

(2) Kennilworth： イングランド中部Warwichshire州の都市。古城の廃墟がある。

(3) Stratford-on-Avon: Warwichshire 州南部のAvon河畔の町。W. Shakespeare生誕の地。

(4) Norman: ノルマン様式。1000年頃、ノルマンディ地方を中心に建てられた後期ロマネスクの様式。英国では1066年のノルマン征服以後伝わり、11世紀末まで続いた。半円アーチ、太い柱などが特徴である。

(5) Tudor: チュダー様式。英国ゴシック式最後期の建築様式。垂直様式が特徴となっている。

(6) galbe: (仏) 輪郭。

(7) Le galbe évasé de ses hanches: (仏) 幅広い腰の線。

(8) gonfle: (仏) 膨れた。以下全てフランス語である。goulu (食いしん坊の)、parfume (香り)、peau(皮)、pervers(墜落した)、potelé(肥った)、pudeur(貞節)、Vertu(美徳)、volupté(喜び)。

(9) gallery: 英国のcountuy houseにあるような片方に窓の続く細長い部屋・廊下。

(10) Wilkie Bard: 英国の寄席芸人 (1870〜1944)。

(11) rhetorical question: 修辞的疑問。解答は求めず肯定を予期しながら強いて疑問を出すもの。

(12) Grand National: 大障害物競馬。英国Liverpool市北方のAintreeで毎年3月に行われる。

(13) Sienese: シエナ画派。金彩を用いた装飾的画風の宗教画を特色とする。13〜14世紀イタリアで栄えた。

(14) New Thought: 新思想。19世紀に唱えられた一種の精神治療法。人間の神性を強調し、正しい思考が病気と過失を抑制するというもの。

(15) Mrs. Eddy: Mary Baker.アメリカの女性宗教家。Christian Science (キリスト教の一派で、医薬を用いずに信仰の力によって病気を直す事を特色とする) の創立者。(1821〜1910)

(16) saying you are not ill : Christian scienceの教え。病気は気から起こると考え、病気ではないと唱えてそれを信じれば病気は直るというもの。

(17) Mrs. Besant: Annie Wood　英国の女性神知学者。(1847〜1933)。

(18) court-circular: (英) 新聞に毎日載る宮廷報告。

(19) Monophysite: キリスト単性論者。キリストは神性と人性が一体化したものであると説く論者。

(20) tit: シジュウカラ。柔らかい羽、厚く短い円錐形のくちばしをした小鳥。

(21) Lucina: ルキナ。出産を司るローマ神話中の女神。時としてJunoと同一視される。

(22) Eramus Darwin: 英国の博物学者、医者、詩人。C.R.Darwinの祖父で進化論の先駆者の一人。(1731〜1802)

(23) Lichfield: イングランド中部のStaffordshire州南東部の都市。古い大聖堂がありSamuel Johnsonの生誕地。

(24) Anna Seward: 英国の詩人 (1747〜1809)。